

「わたしはあの人を知らない」

2023年4月2日（日）仙台教会主日礼拝説教 ルカ 22：54～62

牧師 宇都宮 毅

おはようございます。2023年度がいよいよ始まりました。新型コロナウイルス感染症によって、この3年間は思いどおりの歩みをする事ができませんでした。しかし当たり前前にできると思っていたことができないことで、多くのことを学ぶことができました。当たり前などという事柄は存在しないということ、人と人とが顔と顔を合わせて、会話することも当たり前ではありませんでした。今年度がどうなるのかはわかりません。しかし日常で起きる事柄一つ一つに感謝をしながら、一年間歩んでいきたいと思えます。

さて本日からイエスの十字架の歩みをおぼえての受難週となります。特に今朝はイスラエルの首都エルサレムにイエスが入場された日を記念しての棕櫚の主日礼拝となっています。棕櫚の主日とはイエスがエルサレムに最後の入城をされた時、民衆が棕櫚の枝を道に敷き、あるいは手に持って迎えたことを記念する祝日です。イエスは子ロバに乗って登場します。軍馬のような足が速く、優雅な動物に乗っての入場ではなく、足も遅く、体も大きくないロバで入場します。それはイエスがローマ帝国のように力による勝利を望んでいたのではなく、小ささによる人々への共感や寄り添う思いを表していたのです。けれども、その意味を誰もわからなかったのです。近くにいる弟子たちさえ、イエスの思いに気づいていなかったのです。弟子たちは極めて政治的な期待をイエスに求めていました。彼らはローマ帝国に武力により支配され、ユダヤの多くの町の人たちが重い税金を課せられていました。彼らは自分たちを解放し、力を与えてくれる指導者を求めていました。まさに、エルサレム入城は弟子たちにとって、ローマ帝国に対しての勝利、凱旋式と同じ意味だったのです。しかし、現実はそのようなものではありませんでした。イエスの凱旋は十字架という苦難に向かうことであり、イエスに対しての裏切りという人間の恐ろしさを知る出来事だったのです。

今朝は人間が持っている裏切りということ、ルカ 22：54～62 から共に聴いてみたいと思えます。この個所の少し前で、イエスはペトロにこう語っています。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」するとシモンは、「主よ、御一緒なら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう」(22：31～34)。

シモン・ペトロは弟子たちの中で、リーダーとしての働きをしている者でした。ペトロとはヘブライ語で岩を表す言葉でした。岩のように強い意志、信仰を持っている者、それがシモン・ペトロだったのです。

イエスはそんなペトロが大変な状況になることを感じていたのです。「信仰が無くならないように祈った」と書かれています。原文では「信仰が傾かないように祈った」という意味になります。信仰とは人間が神のことを信じること以上に、神が私たちのことを信頼してくれていることを意味しています。神が私たちをそのままの存在として、肯定してくれている事柄です。ペトロはそんな神からの信頼を失ったと思うような事柄に出会おうとしていたのです。

ここでペトロは、イエスと一緒に「牢に入っても死んでもよい」と言っています。イエスと寝食を共にし、伝道活動をしてきたその全ての事柄は神の出来事であり、その中で、イエスが救い主であることを確認していたのです。さらに彼は自分がイエスを裏切るはずがないという強い意志を持っていたはずでした。

私たちも同じではないかと思うのです。自分が愛している人々、その人々を最初から裏切りたいと思っている人はいません。裏切るはずがないのです。

ところが、そんなペトロの生きている状況が一変したのです。あの愛すべきイエスが逮捕され、大祭司の家に連行されてしまいます。彼はイエスを心配し、その中に潜入します。そこはイエスを殺そうとしている人々の殺気みなぎる場所です。その勇氣は確かにすごいものです。すると、その女中が彼を発見してしまったのです。彼女はペトロをじっと見つめ、言ったのです。「この人も一緒にいました。」

「しまった。見つかってしまった。」ペトロは恐らくパニック状態になったはずでした。「まずい、自分も逮捕されてしまう。命が危ない。」彼の心の中は、自分を守ることしか考えていなかったでしょう。そのとき、とっさに彼の口から出た言葉が「わたしはあの人を知らない」だったのです。「知らない。」こんなに残酷な言葉はありません。知らないとはこの人は私とは関係がないという意味です。イエスと行動を共にし、築いてきた関係性が、愛され愛してきた関係が、もろくも崩れる瞬間が訪れたのです。

さらに、他の人が言います。「お前もあの連中の仲間だ。」またペトロは言うのです。「いや、そうではない。」ペトロは自分の命を守るために、イエスとの関係だけでなく、他の弟子たちとの関係性をも否定をしています。

イエスとの関係を、そして同じ釜の飯を食べてきた弟子たちとの関係をも否定してしまったペトロは、どんな思いだったでしょう。たき火の前で、彼はずっと自分を見つめていたはずでした。「自分を守るためだ。しょうがない。誰だって、同じ状況になったら、同じ行動を取るはずだ」と言い訳をし、そのような思いと裏腹に、「どうして、イエス

や弟子たちを裏切ってしまったのか」という悔いる思いを抱えていたはずで

そして、一時間が経っていたのです。何と長い一時間だったでしょう。そこに別の人が現れ、言ったのです。「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから。」ペトロの語る言葉がガリラヤ地方独特のなまりがあったのです。イエスと仲間である理由にガリラヤが出されてしまい、まずいと思った彼は慌てて、「あなたの言うことは分からない」と答えたのです。

彼にとって、ガリラヤは特別な土地でした。故郷であり、彼の人生の大半がそこにあり、イエスとの出会いがあったのです。ペトロがペトロである理由がそこにあったのです。ペトロにとって、ガリラヤは最も大切な場所だったのです。彼はそのガリラヤさえも、自分が自分であり、自分の人生がそこにあることさえこの瞬間に捨ててしまったのです。ペトロは三度イエスを否定し、弟子たちとの歩みを、そして自分の人生をも否定してしまっただけです。三度とは完全数であり、何度もという意味が含まれる数字です。つまり、完全に自分を守るために、全てに対して自分も含めて裏切ったのです。それは全てを無くしたということです。

まだ言い終わらないうちに、鶏が突然鳴きます。彼の裏切りを待つかのように、鶏が鳴いたのです。そのとき、イエスは振り向いて、ペトロを見つめたということです。その眼差しはどんなものだったでしょう。

そこには愛と憐れみが凝縮していたように思うのです。イエスはペトロがそうなることを知っていたことになります。イエスは人間を知っていたのです。人間は自分を守るためなら、人を裏切り、あらゆる関係を断ち切り、共に歩んで来た歴史さえないものになります。つまり、自分の存在さえ無き者にしてしまうのです。何と人は弱い存在なのでしょう。それを理解し、憐れみ、愛す視線がペトロに向けられていたのです。

彼は「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの声を思い出し、泣き崩れていきます。

私たちの人生においても、このような裏切りは度々起きてしまいます。自分を守るために、自分の家族を守るために、自分の国を守るために。その言葉が私たちから吐かれるとき、私たちはすべてを壊し、裏切り、命を奪うのです。自分を守るとは、何なのでしょう。

私たちは人生の中で「わたしはあの人を知らない」という言葉をどれほど叫んできたのでしょうか。私たちは自分の存在を守るという理由で、周りの人たちとの関係を断ち切っていくのです。自分の命のためなら、自分の大切な物を守るためなら、神を裏切り、友を裏切るのです。結局自分を守る私は孤独になり、自分さえ失ってしまうのです。

そんな私たちの前に、悲しい目をした友や隣人、多くの人たちがいます。その瞳はイ

イエスのものと同じです。その眼差しは関係性を切ろうとし、自分も裏切ろうとする私への憐れみの思いに満ちています。

特にイエスの眼差しは関係性を断ち切ろうとする私たちに対して、関係性を手放そうとしない思いに満ちたものです。それはまさに私たちの存在を肯定し続ける神を表しています。私たちを孤独にさせない眼差しが今ここに注がれています。

イエスはこのようにペトロに言っています。「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

「信仰が無くならないように」とは、神があなたのことを大切に思い、信頼してくれていることを忘れないようにということです。イエスは裏切る弟子のために祈ったのです。人々を裏切り、捨てさってしまう弱い私たちを見捨てようとする存在があることを、イエスから知ることができます。そこにインマヌエル、私たちに伴う神が見えてきます。そんな眼差しを向けられた私たちは、自分の弱さを知った故に、今度は同じ弱さに苦しみもがいている友、隣人を励ますことに道が開かれます。

この裏切りによって、イエスは十字架に架けられ、殺されていきました。その十字架から逃げたペトロはその後、イエスを伝える歩みを始めました。十字架とは私たちの弱さ、愚かさを知らされる時です。けれどもそれだけでは終わらず、やり直すときが与えられることを証言してくれています。

今週はイエスの十字架の苦難を覚える時です。それは決して 2000 年前の事柄だけを言っているわけではありません。今の現実社会の中での私たちの歩みを振り返り、私たちは隣人との関係性を考え、そしてどうやり直していくのか、考えてみたいと思います。

最後に、聖書を一箇所お読みして、本日のメッセージを終わります。ルカ 7:47「だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されたことの少ない者は、愛することも少ない。」